

program note

曲目解説:増田良介

ショスタコーヴィチ:24の前奏曲とフーガ 作品 87

1950年7月、J. S. バッハの没後200年を記念する音楽祭がライブツィヒで開催された。ドミトリー・ショスタコーヴィチ(1906-1975)は招かれてこの音楽祭に出席した。このとき開催された第1回バッハ国際コンクールのピアノ部門で優勝したのが、後にソ連を代表するピアニストのひとりとなるタチアーナ・ニコラーエワ(1924-1993)だった。審査員を務めていたショスタコーヴィチは、彼女の弾くバッハを聴いて大きな感銘を受けた。

ショスタコーヴィチが、《前奏曲とフーガ》を書き始めたのは、その年の10月10日だった。ニコラーエワはこう回想している。「モスクワに帰って数日後、彼は私を家に招き、《前奏曲とフーガ》の数曲を弾いてくれました。以後、彼はほぼ毎日これを繰り返しました。」作曲は番号順に行われたが、多くは2～3日、長くても9日で書き上げられている。そして1951年2月25日、すべての調性による24の前奏曲とフーガが完成した。

全曲の公開初演は、1952年12月、ニコラーエワによってレニングラードで行われた。彼女はその後この曲集を各地で演奏し、後年、3度もの全曲録音を行っている。長大な曲集であるため、ほかのピアニストがたいてい抜粋で演奏したのに対し、彼女は全曲演奏にこだわり、これこそが作曲者の望む形だったと主張している。

曲は、バッハの《平均律クラヴィーア曲集》と同じく24すべての長調と短調で書かれている。しかし、八長調→八短調→嬰八長調→嬰八短調のように半音ずつ上昇するバッハと異なり、ショスタコーヴィチの曲集は、八長調→イ短調→ト長調→ホ短調というように、長調・短調それぞれの主音が五度ずつ上昇する。

この曲集の特徴は、その音楽的な多様性だ。特に前奏曲は、ユダヤ風の語法を取り入れたもの(第8、22番)、ショスタコーヴィチの好んだパッサカリア形式によるもの(第12、16番)、ユーモラスなもの、深刻なもの、擬似バロック的なもの、無調に近いものと実にバラエティに富んでいる。ショスタコーヴィチは、「腕が鈍らないように」この作品を書いたと述べているが、この曲集は、まさに彼の作曲技法の見本帳のようだ。

ユリアンナ・アヴデーエワは、ショスタコーヴィチの没後50年にあたる今年、《24の前奏曲とフーガ》に取り組んでおり、2月から3月にかけて、ペンタトーン・レーベルに全曲録音を行ったほか、本演奏会を含む、世界各地での演奏が予定されている。

また、彼女は自らの公式YouTubeチャンネルで、この曲集を1曲ずつ、自らピアノを弾きながら解説する動画を公開している(英語)。いずれもこの曲に対する彼女の深い洞察がわかる興味深いものなので、ぜひ #avdeevashostakovichproject で検索してご覧いただきたい。

第1番 八長調 Moderato/Moderato

サラバンド風のリズムとコラール風の響きをもつ優しい前奏曲に、すべて白鍵で演奏されるフーガ(4声)が続く。

第2番 イ短調 Allegro／Allegretto

分散和音が連続する急速な前奏曲に対し、フーガ(3声)はこの作曲家らしい諧謔の感じられるリズムカルな音楽となっている。

第3番 ト長調 Moderato non troppo／Allegro Molto

前奏曲は、ユニゾンの威厳のある旋律と細かい音符の対話で、ムソルグスキーを思わせる。フーガ(3声)はジグ風の推進力が特徴。

第4番 ホ短調 Andante／Adagio

前奏曲は悲劇的な性格をもっている。フーガ(4声)は静かに始まり、壮大に高揚していく。なお、この曲と第24番のみが二重フーガとなっている。

第5番 ニ長調 Allegretto／Allegretto

前奏曲は、ハープ風のアルパッジョで始まる。スタッカートの特徴とするフーガ(3声)の主題は、どこか鳥のさえずりのようだ。

第6番 口短調 Allegretto／Moderato

悲劇的な色調の前奏曲は、複付点音符のリズムで一貫している。フーガ(4声)の主題は、シューベルトの「未完成交響曲」冒頭に似た暗い音型で始まる前半と、細かく動く後半からなる。

第7番 イ長調 Allegro poco moderato／Allegretto

前奏曲は、左手が保持する主音の上で、優美な主題が歌われる。ピオネール(少年団)のラッパの旋律から採られたと言われるフーガ(3声)の主題は、イ長調主和音の構成音のみからなっている。

第8番 嬰ハ短調 Allegretto／Andante

前奏曲は、左手の単純な伴奏の上で、右手がユダヤ的な色のある軽快な旋律を弾く。フーガ(3声)の主題は、うめき声のようにも聞こえる不安なものだ。

第9番 ホ長調 Moderato non troppo／Allegro

2オクターヴのユニゾンで弾かれる、高低2つの主題が対話する前奏曲に続き、この曲集で唯一の2声のフーガが続く。

第10番 嬰ハ短調 Allegro／Moderato

両手が対話する前奏曲は、バッハの《インヴェンション》第1番を思わせる。フーガ(4声)の主題はメランコリックなロシア風だ。

第11番 口長調 Allegro／Allegro

軽快でおどけた前奏曲は、ショスタコーヴィチが子供のために書いたピアノ曲に通じる。急速なフーガ(3声)の主題は前奏曲と関連している。

第12番 嬰ト短調 Andante／Allegro

前奏曲はパッサカリアで、冒頭のバス主題が9回変奏される。曲の最後ではフーガの主題が

暗示される。フーガ(4声)は4分の5拍子で、前奏曲とは対照的に、エネルギッシュで複雑な展開を見せる。

第13番 嬰ハ長調 Moderato con moto/Adagio

前奏曲では、晴れやかな右手の旋律に伴奏の和音が応える。この曲集で唯一の5声のフーガでは、控えめな主題に基づいて、複雑で厚みのある響きが築かれていく。

第14番 変ホ短調 Adagio/Allegro non troppo

シヨスタコーヴィチの交響曲に通じる緊張感のある作品。前奏曲は、左手のトレモロにのせて、右手がブイリーナ(物語詩)風の悲痛な旋律を歌う。フーガ(3声)もロシア民謡風の憂愁のあるもの。

第15番 変二長調 Allegretto/Allegro molto

前奏曲は一見明るいワルツのリズムで始まるが、しばしば不穏な響きとなる。急速なフーガ(4声)の主題は十二音音楽風の響きをもつ。フーガの途中には前奏曲のリズム音型も顔を出す。

第16番 変口短調 Andante/Adagio

静かな悲しみをたたえた前奏曲は4分の3拍子で、シャコンヌの形式で書かれている。フーガ(3声)は、民族楽器グースリから想を得たとされる、即興的なレチタティーヴォ風の特異な主題をもつ。

第17番 変イ長調 Allegretto/Allegretto

前奏曲は、分散和音に飾られた平易な旋律で始まる。中間部は暗いユーモアを感じさせる。フーガ(4声)は比較的明るい雰囲気、4分の5拍子で書かれている。

第18番 ハ短調 Moderato/Moderato con moto

前奏曲は、4分の3拍子で舞曲風の主部と、アダージョでホ長調の中間部からなる。フーガ(4声)の主題はロシア的な色が濃い。

第19番 変ホ長調 Allegretto/Moderato con moto

前奏曲は、コラル風な荘厳な楽句と、どこかそれを茶化すようなユーモラスな楽句が対比される。フーガ(3声)は、半音階的に進む個性的な主題による。

第20番 ハ短調 Adagio/Moderato

前奏曲は、重厚な低音部の旋律と、高音部の寂寥感のある旋律が対話する。フーガ(4声)の主題は前奏曲の主題と関連しているが、より穏やかな性格をもっている。

第21番 変口長調 Allegro/Allegro non troppo

急速な無窮動風の前奏曲に、ファンファーレ風の主題によるフーガ(3声)が続く。

第22番 ト短調 Moderato non troppo/Moderato

前奏曲は、旋律も伴奏もほぼ最初から最後までひとつの音型で貫かれている。フーガ(4声)

の哀愁を帯びた主題は、ロシア民謡風だ。

第23番 へ長調 **Adagio/Moderato con moto**

前奏曲は、美しい旋律が何度も転調を繰り返しながら歌われていく。簡素な味わいの主題によるフーガ(3声)が続く。

第24番 二短調 **Andante/Moderato**

前奏曲は、荘厳な前半(アンダンテ)と、右手が単音でひそやかに歌い始める後半(マエストロ)からなる。フーガ(4声)は、前奏曲後半の主題に始まり、壮大なクライマックスを築く。